

# 吉祥天女感応譚考

—『日本靈異記』中巻第一三縁について—

永田典子

序

『日本靈異記』中巻第一三縁は、我が国最古の吉祥天女感応譚である。その本文は次の通りである。

生ニ愛欲ニ恋ニ吉祥天女像ニ感応示ニ奇表縁

和泉国泉郡血滄山寺、有吉祥天女孀像。聖武天皇御世、信濃国優婆塞、来住於其山寺。睇之天女像ニ而生ニ愛欲、繫心恋之、毎ニ六時ニ願云、「如天女ニ容好女賜レ我」。優婆塞夢見婚ニ天女像、明日瞻之、彼像裙腰不淨染汗。行者視之、而慚愧言、「我願似女、何忝天女專自交之」。媿不語他人。弟子偷聞之。後其弟子、於師無礼故、嘖擯去。所擯出里、訕師程事。里人聞之、往問虚美、並瞻彼像、淫精染穢。優婆塞不隠事、而具陳語。

諒委、深信之者、无感不応也。是奇異事矣。如

涅槃經云。「多婬之人、画女生欲」者、其斯謂之矣。<sup>①</sup>

『今昔物語集』卷一七第四五話は本縁を基とする説話

である。しかし、その結語は改変され、「此ヲ思フニ、

譬ヒ多婬ナル人有テ、好キ女ヲ見テ、愛欲ノ心ヲ発ト云

トモ、強ニ念ヲ繫ル事ヲ可止シ。此レ極テ無益ノ事也、

トナム語り伝ヘタルトヤ<sup>②</sup>」となっている。こうした結語

のずれは、『日本靈異記』と『今昔物語集』の編纂者の

趣旨の相違を表しており、これについては、既に高木市

之助氏や播摩光寿氏等の論考<sup>③</sup>がある。

吉祥天女像を淫水で汚すことは、仏罪に相当する行為

であるから、仏教的教訓性からすると、『今昔物語集』

卷一七第四五話の結語の方が適確である。だが、本縁の

結語にもそれなりの意図があり、そうした表現を採らざ

るを得ない事情、更に、仏罪に相当する行為を扱った説話を『日本靈異記』に所収すべき必然性が編纂者にあつたのであり、こうしたことは、『日本靈異記』の本質を見極める手掛りになり得ると考えられる。

本論では、この吉祥天女像を淫水で汚す説話がどのようにして形成されたかについて、若干の考察を試みたい。

## 一

山寺に修行する優婆塞が吉祥天女像の美しさに愛欲を生じるとするのは、修行者の禁欲生活の裏面をなしており、本縁からその当時の修行者の精神生活の一面を窺うことができる。

だが在家の者とは言え、仏道を修めている優婆塞が天女像に愛欲を生じ、「如<sub>二</sub>天女容好女賜<sub>一</sub>我」と願ったというのは、持戒に反する行為である。優婆塞自身、天女像との事の次第を「媿不<sub>レ</sub>語<sub>二</sub>他人<sub>一</sub>」とあり、その弟子が彼の悪口を言うのに天女像との情事を暴くのは、それを非難すべきことと意識しているからである。

ところが、景戒は優婆塞に対して何の咎め立てもせず、結語に「諒<sub>レ</sub>委、深信<sub>レ</sub>之者、无<sub>レ</sub>感不<sub>レ</sub>応也」とあるように、その関心は天女像が感応したことの方に重点を置

いており、優婆塞の愛欲を肯定的に扱っている。しかし、景戒は愛欲を全面的に肯定している訣ではない。上巻第三〇縁では、膳臣広国の父親が地獄の責め苦を受ける悪因の一つに、他人の妻を犯したことが挙げられている。

愛欲を生じるのは人間ばかりではなく、中巻第二縁では、雌鳥が他の雄鳥と姦通しており、和泉国泉郡の大領血沼県主倭麻呂はその邪淫を見て世を厭い、出家してしまふ。この話の本文には、「示<sub>二</sub>鳥鄙事<sub>一</sub>、領<sub>三</sub>發<sub>二</sub>道心<sub>一</sub>。先善方便、見<sub>レ</sub>苦悟<sub>レ</sub>道者、其斯謂<sub>レ</sub>之矣。欲界雜類、鄙行如<sub>レ</sub>是。厭者背<sub>レ</sub>之、愚者貪<sub>レ</sub>之」とあり、邪淫を「欲界雜類、鄙行」とし、これを戒める態度が示されている。

中巻第一縁は、上田三郎という男が僧を咎めたことと邪淫の行いにより、悪病に罹って死ぬ話である。この場合の邪淫は、自分の妻を犯したことを指すが、妻はその時、悔過の法事に参加していた。従って、夫婦であっても、清浄な生活をすべきそうした時に夫が妻と交わることは、禁戒を破ることになり、僧を咎めることと同等の悪因として、男は死の悪報を受けたのである。

下巻第一八縁では、写経師が雨宿りの堂の中で娘と交わり、二人抱き合つたまま一緒に死んだとあり、写経師の行為を邪淫とし、死は護法善神の刑罰とされている。

彼の行為が邪淫と見做される理由は、本文に「愛欲之火、雖<sub>レ</sub>焦<sub>ニ</sub>身心、而由<sub>ニ</sub>姪心、不<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>穢行。愚人所<sub>レ</sub>貪、如<sub>ニ</sub>蛾投<sub>ニ</sub>火」とあるように、「姪心」が原因となっている。

以上のように、他人の妻を犯したり、自分の妻であっても、悔過の法事期間中に同衾したり、猥らな気持ちで交わることは、死の悪報を受けるべき行為とされ、景戒の邪淫に対する明確な態度が示されている。

ところで、中巻第一三縁の優婆塞の愛欲は、これらの邪淫と同質のものと思做されるであらうか。

愛欲は人間本来の欲望の一つであって、それに溺れている限り、人間は常に飢えており、迷いや貪りを引き起こす根源となる。そのため、仏教ではこれを排撃し、それを脱却して初めて悟りへの道が開かれるとして、解脱を説いている。<sup>(4)</sup>

従って、本縁の優婆塞が愛欲を生じたことは、それ自体が罪と思做されるべきなのである。だが、景戒が彼を非難の対象としていないのは、その愛欲が前述の邪淫と質的に異なるからであらう。既に、優婆塞が妻帯者でないこと、愛欲を生じたものの、猥らな心を起こして衝動的に行動に移すというのではなく、その成就を一途な信仰に託していることによって、彼は死の悪報を免れているのである。

下巻第二五縁では、魚を捕るという殺生の業に携わっていた紀臣馬養、中臣連祖父麿の二人が遭難したが、一心に釈迦牟尼仏を念じたため、命が助かったという。上巻第一一縁において、漁夫が幼い時から魚を捕っていたために現世で悪報を受けたとし、殺生の罪を論しながら、こうして馬養、祖父麿が悪報を受けず、却って釈迦如来の加護を得ることができたのは、二人の信仰心によるものである。

また下巻第六縁は、禪師の食べようとした魚が法華経となり、俗人の非難を覆す話で、禪師は僧としての禁を犯そうとしたのにも関わらず、仏の加護を受けている。

その理由は、本文の結語に「当知、為<sub>レ</sub>法助<sub>レ</sub>身。於<sub>ニ</sub>食物者、雖<sub>レ</sub>食<sub>ニ</sub>雜毒<sub>ニ</sub>而成<sub>ニ</sub>甘露、雖<sub>レ</sub>食<sub>ニ</sub>魚肉<sub>ニ</sub>而非<sub>ニ</sub>犯罪。魚化成<sub>レ</sub>経、天感齊<sub>レ</sub>道」とあるように、仏法のためであれば、魚肉を食することは罪にはならないからであり、法華経の信奉者に正当な加護のあることを説いている。

この二説話のように、罪を犯しても、仏法の信奉によって罪が打ち消されるということは、信仰が罪ある者までも善報に導く高徳なものであることを意味する。愛欲はそれ自体仏罪であるが、中巻第一三縁の優婆塞の信仰はそれよりも優位であるため、天女像の感応を受けることができたのである。換言すれば、優婆塞が愛欲を生じ

たことに報いを受けず、天女像と同衾できたのは、彼の信仰の深さの証明と言える。

このように、本縁は下巻第六縁、第二五縁と同様に、信仰の高徳の確認をテーマとする説話であり、『日本霊異記』の基底をなす因果応報の理は、愛欲を生じたことではなく、信仰によって天女像の感応を得たことに示されているのである。

## 二

一般に、現存する吉祥天女像で最も優れているのは、奈良薬師寺の絵像とされている。松浦貞俊氏はその印象を、理想化された仏画と言うよりは、実在の美女を神像に事寄せて描いたものと思える程に豊麗典雅、妖艶でさえあるとし、本縁は天女像のそうした点に起因して発生したものと推想されている。<sup>(5)</sup>

また川口久雄氏は、「山寺に独身生活をする青年僧にとつては、くらい御堂のほのかな光の中にたつ吉祥天女像は、おさえがたい情熱・愛欲の対象となることも自然である。」と述べられている。

仏道修行者が愛欲を生じて女性を求めることは、戒律の遵守によって律する限り、破戒に違いないが、二氏の見解に示されるように、本縁の優婆塞が天女像の美貌に

惹かれて、「如<sup>三</sup>天女容好女賜<sup>レ</sup>我」と祈願することは、虚構の世界に限らず、現実社会でも充分にあり得ると考えられる。従って、本縁は天女像の美貌と仏道修行者の愛欲を基盤として成り立っており、既述のように、優婆塞が一途な信心から天女像によって愛欲を満たされることは、信仰の高徳及び信仰と感応の因果律の存在を確認する具体的事象となっている。

しかし、本縁の原話と考えられる血滄の山寺における吉祥天女像の靈驗譚の発生段階において、天女像の感応が本縁の如き同衾行為で示されていたとするには疑問がある。

天女像は優婆塞の祈願に応じて彼の夢に現れ、自ら彼と交わるのであるが、優婆塞の言動には天女像の感応を得たことを素直に喜ぶ様子がなく、反対に、自分の行為を恥じて他人に語らなかつたとある。それは「我願<sup>二</sup>似女<sup>一</sup>、何忝天女専自交之」という彼の言葉から判るように、天女像自身が彼と同衾したことを理由とする。従って、天女像の行為が優婆塞の「如<sup>三</sup>天女容好女賜<sup>レ</sup>我」という祈願の通りに応じたことにならないこと、更に、本来畏敬の対象である天女像を淫水で汚してしまったという後悔の念によって、優婆塞は天女像の感応を善報として体得していないことになる。

天女像が自ら優婆塞と交わったというのは、彼の信心が余りにも深かったことの証明となり、また天女像の慈悲深さを強調することにもなる。だが、天女像の美貌から生じた愛欲でありながら、優婆塞がそれを充足させる相手に人間の女性を求めたのは当然のことであり、天女像がその相手にならずに、彼に他の女性を授けた場合でも、そこに因果律の存在を確認することができるはずである。更に、優婆塞もその女性を信仰の力による賜物として、素直に喜びを表し、信仰と感応の因果律を会得できることになる。

従って、血滯の山寺における天女像の靈驗譚は、先ず、優婆塞の祈願が天女像にそのまま聞き入れられる話、即ち、天女像が優婆塞の愛欲による一途な信心に感応して、その愛欲を満たしてやるために、彼に望みの女性を授けたという話であったと考えられるのである。

### 三

『日本靈異記』には、本縁の優婆塞と同様に、信仰の力によって女性を得た人物が今一人いる。それは上巻第三一縁の主人公御手代東人である。彼は仏道修行の験力と観音の威徳によって、「南无、銅錢万貫白米万石好女多徳施」という祈願通り、従三位粟田朝臣の娘とその家

の財産を手に入れることができたところだが、話はそこで終わらず、妻の死後、彼女の姪が彼の後妻になるというように展開する。

最初の結婚は、粟田朝臣の娘が病気の時、東人が陀羅尼の靈驗でそれを治したことをきっかけとしている。だが、数年後に妻が死にそうになった時、彼がそれを平癒させるべき手段を講じたことについて、本文には何も記されていない。高橋貢氏の論考<sup>(?)</sup>にもあるように、彼が再婚するためには、むしろ妻は早く死ななければならず、話の展開上、彼は呪文を唱えるようなことをしてはいけないことになり、話の目的を達成するために、筋立てに無理を生じている。

では、何故そうした無理を生じてまで、東人の再婚を語らなければならないのであろうか。粟田朝臣の娘との結婚には、彼女の親族達の反対があったが、二人の愛情の強さを知った親族達は、彼らを夫婦として認め、家の財産を全て東人に施し与えたところ。これだけでも一つの完結した話であり、東人が実際に二度結婚していたにせよ、筋立てに無理を生じて再婚の話を持ち出さなくても、充分観音の感応譚になり得る。

この問題に関して、『日本靈異記』の他の感応譚を見ても、祈願者の殆どが極貧や災難の窮地にあり、そ

れが極まった状態の中で諸仏の感応を受けている。祈願者をそうした状況に設定することは、説話の劇的效果を高め、それを享受する者に緊迫感を与え、しかも祈願者が福徳を得たり、危難を免れることができた時、それが諸仏の感応によるものであることが一目瞭然に判る。

こうした感応譚に比べて、上巻第三一縁の東人の祈願は富と女性を求める欲望の充足であるため、彼の置かれている状況に緊迫感や悲哀感を欠いている。従って、彼の祈願が修行の験力と観音の威徳によって達成されても、感応譚としての感銘は薄い。だが、東人が二度結婚し、二度目の妻の家の財産も得るというのは、彼の欲望が満たされたこと以上に、彼の修行の験力の偉大さと観音の威徳を強調することとなり、より印象深い話になっている。つまり、筋立てに無理を生じてまでも東人の再婚を語るのは、彼の祈願内容による感応譚としての物足りなさに起因すると考えられるのである。

祈願者の願いに緊迫感、悲哀感がないのは、本縁の場合も同様である。優婆塞が一日六度の勤め毎に祈願したというのは、確かに彼の真剣さを窺わせる。だが、「如<sub>二</sub>天女容好女賜<sub>レ</sub>我<sub>一</sub>」という祈願は、やはり欲望の充足を願ったにすぎず、彼が信仰の力によって天女像から女性を授けられても、信仰と感応の因果律を確認する事象で

はあるが、感応譚としての感銘の薄さは免れることはできない。

従って、天女像の感応が優婆塞に女性を授けることから、自ら彼と同衾することに変化したのは、上巻第三一縁と同様に、天女像の靈験が説話の享受者の興味、関心を惹くものとなるために変容した結果と推測されるのである。

#### 四

天女像が優婆塞と同衾したのは、彼の夢の中においてであるが、翌日、彼は天女像に染み付いた淫水を発見することによって、夢の中の出来事が事実であったことを知り、天女像の感応を確認する。

このように、天女像に染み付いた淫水の発見は、天女像の靈験の現実性を説くための証拠提示であり、本縁において最も重要な要素となっているが、これはこの話に限ったものではない。『日本靈異記』には、本縁の外にもそうした要素を有する説話がある。それは中巻第一四縁、第三四縁、第四二縁の三説話で、何れも貧しい女が仏像の靈験によって望外の福徳を得ることをテーマとしており、また各々の説話の構成も共通している。これら三説話の内容を表にまとめると、次のようになる。

	中巻第一四縁	中巻第三四縁	中巻第四二縁
祈願者  援助者の訪問  援助者の帰去	貧しい女王  奈良の左京の服部堂の吉祥天女像  「我先世殖貧窮之因、今受窮報。我互為食入於宴会、徒噉人物、設食無便。願我賜財」 女王を育てた乳母が、女王が客を招待すると聞き、食べ物と食器を用意して来る。乳母は女王からもらった着物を着て帰る。	両親を亡くした娘  観音の銅像  「我乃一子而無父母。孤唯独居。亡財貧家、存身无便。願我施福。早脱急施」 隣の金持ちの家の乳母が、主人の言いつけによって、食べ物と食器を持って来る。乳母は娘からもらった黒い衣を着て帰る。	海使衣女（九人の子供がおり、極めて貧しい） 穴穂寺の千手観音像  福分 妹が錢百貫の入った皮櫃を持って訪れる。 足に馬糞の染み付いた妹は、姉に皮櫃

仏像の感応の確認	服部堂に行き、吉祥天女像を拜もうとすると、乳母に着せた着物が、天女像に掛かっている。	礼拝しようと仏殿に入ると、隣の乳母に着せたはずの黒い衣が、観音像に着せてある。	を預けて帰る。花香油を買って、千手観音像の前に捧げ行つて見ると、その足に馬糞が付いている。
----------	--------------------------------------------	-----------------------------------------	-----------------------------------------------

右の表に示したように、祈願者の窮状を救う援助者の帰去時の特徴、中巻第一四縁と第三四縁では着物、第四二縁では足に染み付いた馬糞が、後に仏像の感応を確認するための証拠となっている。

この仏像の感応を知る契機となる証拠提示は、田植地藏伝説を構成する要素にもなっている。田植地藏伝説は、地藏靈驗譚の中で最も流布しているもので、見知らぬ人がやって来て村人の田植を手伝い、仕事が済むと急になくなってしまいが、その夜または翌日、村人が日頃信心している地藏の腰や足に泥が付いているのを発見するといふ内容である。この伝説は中世の説話集にも認められ、『地藏菩薩靈驗記』巻四第一二話、『宝物集』巻三の西坂本の老女の話等がある。この外に、『古本説話集』巻下第六七話では、観音が信女に代わって田植をするが、田植地藏伝説と同様に、厨子の中の観音は、腰よ

り下が泥に浸って足が真っ黒で、両手に苗を攪んでいたという。また『地藏菩薩靈驗記』巻一〇第七話は水引地藏の話であるが、田に水を引く小法師に射た矢が地藏の胸に突き刺さっていたとあり、それによって地藏の靈驗が確認されているため、この矢は田植地藏の泥と同じ機能を果たしていることになる。

ところで、先述の貧女が福德を得る三説話や田植地藏伝説で注意したいのは、祈願者の援助者や田植を手伝う人間が、登場時において、周囲の者にその正体を気付かされていないということである。つまり、これらの話における感應確認のための証拠提示は、仏像の化身を前提条件としており、証拠提示の機能が充分發揮されるためには、仏像が正体を知らない姿で登場することが必要條件となっている。

このように、仏像の化身の要素と感應確認のための証拠提示の要素は密接な関係にあるが、決して不可分の関係にある訣ではない。

『日本靈異記』上巻第六縁は、観音が老人に化身して、川を渡れずに困っている主人公を救う感應譚である。この話では、主人公は川を渡り終わって舟から下りた時、一緒に舟に乗っていたはずの老人の姿が見えず、舟も消えてしまったことから、老人が観音の化身であることを

知ったとし、老人の正体を明確に知る証拠は提示されていない。だが、老人の登場時において、やはり主人公はその人物が自分の祈っていた観音であることに全く気付いていない。

従って、諸仏が祈願者の願いに感應する際に、自らの行為で直接的に祈願者を救援する方法を採る場合、感應確認の証拠の有無に関わらず、化身を悟られない姿で登場するのであり、後に援助者の正体を知る証拠提示の要素があれば、尚更そうすることがその要素の機能を生かすことになる。

## 五

本縁における吉祥天女像に染み付いた淫水に注目してみると、それは優婆塞の夢の中の出来事の現実性を証明する機能を果たしているが、本来は同書の貧女が福德を得る話や田植地藏伝説のように、天女像が化身していたことを証明する機能を持っていたのではないだろうか。

天女像が優婆塞と同衾するためには、たとえ夢の中であっても、壻像から人間の身体になることを条件とする。従って、本縁において、天女像は人間の女性となつて優婆塞の夢の中に示現したことになるが、諸仏の化身による靈驗譚の一般的なものとして、示現の際に正体を



知られない姿に化身していることを考慮すると、天女像は単に攝像から人間の身体になつたのではなく、優婆塞に正体を悟られない姿に化身してしたのであり、天女像が化身して彼の許を訪れるということが、天女像に染み付いた淫水発見の前提としてあつたと考えられる。

このことから、天女像が優婆塞の夢に示現して彼と交わるといふ感応の前段階として、次の如き内容の説話が想定される。

優婆塞は、吉祥天女像の美貌から生じた愛欲によつて、女を得ることを一途に祈る。

ある日、一人の見知らぬ女性が彼の許を訪れる。二人は同衾するが、女はいつの間にかいなくなってしまう。

翌日、彼がいつものように天女像の所に行くと、像に淫水が染み付いているのを発見する。彼は昨夜の女性が天女像の化身であることを知る。

それでは、何故本縁において天女像はそのままの姿で示現したのであろうか。

天女像の化身を攝像から単に人間の身体になることに止めさせたことには、優婆塞の「如三天女容好女賜我」といふ言葉が原因になっていると考えられる。天女像が化身を悟られない姿で示現するためには、優婆塞の求め

る愛欲充足の相手が単なる女性であることを前提とする。だが、その愛欲が天女像の美貌から生じたものであることから、伝承過程において、求める女性が「如三天女容好女」と条件付けられるようになったと推想される。天女像がそのような女性に化身するには、そのままの容貌で人間の女性の身体になればよい訣であるから、化身しての登場は、天女像そのものの示現となる。

ところで、優婆塞の祈願の言葉によつて、化身を悟れない姿で登場するはずの天女像がそのままの姿で示現すると、その時点で既に天女像の感応が確認されてしまひ、天女像に染み付いた淫水は、化身を知る証拠の機能を失ふことになる。しかも、優婆塞が如何に愛欲に悩んでいたとは言え、それを充足するための相手が天女像であることを知つた上で同衾することは、天女像に対する明らかな冒瀆行為であるため、虚構性を持った説話と雖も、優婆塞の意志によつて天女像との同衾はあり得なくなるかも知れない。

こうした問題は、天女像と優婆塞の同衾行為を彼の意志の働く世界での出来事とすることによつて生じるのであるが、その行為を彼の意志の働かない世界におけるものとすれば、この問題は解消されるのではないだろうか。

## 六

『古事記』の神武天皇の東征譚で、天皇の夢に高木神が現れ、八咫鳥を遣わすことを教示したように、古代人はしばしば夢に神の意志を見ている。

『日本靈異記』では、上巻第一八縁において、主人公が夢に現れたある人の「汝昔先身、生在伊予国別郡日下部猴之子。時汝成誦法花經、而燈燒一文不得誦。今往見之」という言葉に従って伊予国に行ってみると、その言葉の通りであったという。

中巻第一五縁では、高橋連東人の死んだ母が、自分のために法華經を説こうとする乞食僧の夢に現れ、前世の罪惡を償うために牛の身に生まれ変わり、息子の家で飼われていることを知らせる。

中巻第二〇縁では、娘に関して悪い前兆の夢を見た母親が、娘のために読経してもらうと、娘は難を免れることができたという。

下巻第一六縁では、寂林法師が夢の中で前世の罪の報いを受けている女と出会う。彼は夢から覚めると、その女の子供達に母親のことを告げ、子供達は母親の罪の償いをする。すると、再び寂林法師の夢に女が現れ、罪の許されたことを知らせる。

この外、中巻第三二縁、下巻第二四縁、第二六縁、第三六縁、第三八縁でも夢が扱われている。

これらの説話では、夢がそれを見た人の前世の告知や前兆、死界と現世を結ぶ糸口等として、話の展開上、重要な意味を持っており、その基底には、『古事記』の神武天皇の夢とともに、夢を単なる生理現象としてではなく、一つの現実と信じていた古代人の思惟があると言える。

しかし、『日本靈異記』の説話において、夢を見た者はそれを意識的に見ようとはしていない。彼らは夢の中で見聞したことに疑いを持たずに信じてはいるが、夢を見ること自体は彼らの意志によるのではなく、夢はそれを見る者からすれば、無意識の世界なのである。

本縁では、天女像と優婆塞の同衾が夢の中の出来事となっている。その行為が現実の世界ではなく、夢の中に設定されているのは、それが優婆塞の見た夢であったにせよ、彼の意志の働かない無意識の世界であったからではないだろうか。換言すれば、天女像がそのままの姿で優婆塞の前に示現し、彼と同衾することを可能にするには、現実世界での優婆塞という仏道修行者の立場から、愛欲に悩む一人の男性となり得る無意識の世界(夢)が、場面としてより相応しいと考えられる。

更に、この同衾行為を夢の中に設定することによって、現実世界を場面とするよりもその事実性が希薄になるが、それが現実の出来事であることを証明するのに、天女像に染み付いた淫水が重要な要素となり、天女像の感応を確認する証拠としての機能が生かされることになる。

## 七

以上の本縁の形成過程についてまとめると、血滄の山寺の吉祥天女像の靈験を説くために、先ず、天女像の美しい容貌と禁欲生活にある仏道修行者の愛欲との出会いを基盤とし、そこに信仰と感応の因果律の觀念を導入することにより、愛欲に悩む者が一途な信心によって天女像から艶福を授かるという話が成立したと考えられる。その艶福は、形成過程の初期段階では、他の感応譚と同様に、祈願がそのまま聞き入れられ、優婆塞に人間の女性を授けるものであったと推測されるが、本縁では、天女像が彼の夢の中に示現して、自ら彼と同衾するという感応になっている。

但し、この二つの感応の方法は、天女像の化身の要素を介在させることによって結び付く。即ち、天女像が人間の女性に化身して、その正体を知らない優婆塞と同衾するのであるが、彼は後に天女像に染み付いた淫水を発

見して、同衾した女が天女像の化身であることを知るという話を想定してみると、同衾時においては、愛欲を充足させる相手を求める祈願がそのまま聞き入れられたことになり、また結果的には、天女像が自ら彼と同衾するという感応を得たことになる。

仏像の化身の要素は、靈験譚を構成する重要な要素として挙げられ、『日本靈異記』の貧女が福德を得る話や田植地藏伝説のように、仏像の感応確認の証拠提示の要素と密接に結び付き、仏像の感応譚の一つの類型的構造を構成している。

本縁における天女像の行為の基底には、仏像の化身の要素が想定され、しかも天女像に染み付いた淫水が、感応確認の証拠の機能を果たしている。従って、本縁の形成過程において、そうした感応譚の類型的構造の関与が認められ、更に、同衾行為の場を優婆塞の夢に設定する等の変容によって、本縁の如き感応譚が形成されたと考えられるのである。

## 結

本縁の優婆塞の愛欲は、戒律遵守の立場から言えば、破戒行為であるが、因果の理は彼の信仰と吉祥天女像の感応を具体的事象として説かれており、たとえ愛欲から

生じた信仰であっても、その力は高德であるとして  
いる。それはこの説話を含めて、『日本靈異記』の享受者  
が、戒律遵守よりも先ず仏法信奉の大切さを知る必要の  
ある人々が大部分であったからと解される。

また本縁では、優婆塞の愛欲を明確に否定せず、むしろ  
それから生じた信心深さによって肯定的に扱っている。  
下巻第三八縁における景戒の「等流果所引故、而  
結<sub>二</sub>愛網業、煩惱之所纏、而繼<sub>二</sub>生死、馳<sub>三</sub>乎八方、以<sub>三</sub>炬<sub>二</sub>  
生身<sub>一</sub>」という嘆きの言葉は、彼の愛欲に対する否定的  
な態度を示しているが、一方、愛欲は日常生活の営みか  
ら切り離して考えることができず、現実社会には、愛欲  
に悩む者が数多くいたと推測される。そのため、愛欲か  
ら生じた信仰によっても感応が得られると説くことは、  
そうした人々にも仏法を信奉せしめる効果があると考え  
られる。

日本における仏教説話が唱導的活動の営みと密接に関  
係していることは、既に承認されることである。その  
活動は信者の獲得によって展開されるが、異国の思想で  
ある仏教の教義には、日本人の伝統的民族感情や日常生  
活と相容れないものが多くあり、そこから発生する問題  
点に如何にして対処してゆくかは、唱導の対象者の心情  
への配慮となって表れる。これを本縁について言えば、

愛欲を信仰に結び付けたところに發揮されており、本縁  
の管理には俗世間によく通じた民間布教僧が関与してい  
たと推測され、更に、本縁は唱導的の営みを持つ説話と考  
えられるのである。

尚、吉祥天女感応譚の成立背景として、当然吉祥天女  
の信仰及び内性を考慮すべきであるが、この問題につい  
ては、今後の考察に待ちたい。

註1 日本古典文学全集『日本靈異記』(小学館)。以下、

『日本靈異記』の本文引用は同書による。

2 日本古典文学全集『今昔物語集二』(小学館)。

3 高木市之助「説話とは何か」(『日本の説話1』東京  
美術)。播摩光寿「吉祥天感応(中13)」(『日本靈異  
記』早稲田大学出版部)。

4 『宗教学辞典』(東京大学出版会)「愛」の項参照。

5 松浦貞俊『日本国現報善悪靈異記註釈』(大東文化  
大学東洋研究所)二〇九頁。

6 川口久雄「古本説話集の世界——説話と説話画——」

(『日本の説話2』東京美術)四五六頁。

7 高橋貢「『靈異記』概説」(『日本靈異記』早稲田大  
学出版部)。

8 『日本昔話事典』(弘文堂)「田植え地蔵」の項参照。

〔付記〕本稿は上代文学会昭和五五年度大会において口頭発表し  
たものを加筆・修正したものである。